

vibration

和宮龍太郎

電極と配線の数をかえれば、人は何にでもなれるのさ、白髪の老人は自慢げに言う。

(じゃボクも別の何かにかえてくれよ)

そいつは難しいのお、老人は面倒くさそうに言うと、電極を変える作業を続けた。

配線はコンピュータとカプセルに繋がり、カプセルの中には黄色の液体がいっぱいに入っている。ポコポコ、と音を立て、その音は暗い研究室をより一層不気味にする。

ここにあった緑色の配線は知らんか？サボテンのシールを貼っているやつ。

(ボクに聞いているのかい？)

(熱情、暖かい心、偉大なり)

それじゃない、あれがないとたいへんじゃ。

(知らないなー)

*

わたしは、今どこにいるのだろう？

ああ、なんてお日様は暖かいんだ。

燦々燦々。Sunsunsunsunsun.

燦々燦々。Sunsunsunsunsun.

周りを見渡せば、一面に雑草が生えている、わたしの腰くらいの高さである。

天井にも同じように雑草が生えている。

少し歩くと、小屋が見えてきた。小屋の隣で水車が勢い良く回っている。

ぐんぐるぐりぐりぐんぐるん。

ぐんぐるぐりぐりぐんぐるん。

あっ、今グラスホッパーが飛んだよ。

ばったばった音をたてながら。

びよんびよんびよこぼんびよんびよんびよびよん。

びよんびよんびよこぼんびよんびよんびよびよん。

小屋のドアを開けて中を覗くと、犬っころがあぐらをかいてテレビを見ている。

アナログ放送は終了しています。

アナログ放送は終了しています。

アナログ放送は終了しています。

背中を丸めてテレビに釘付けになっている。何かの中継らしい。

今日、我々は歴史的瞬間に立ち会うのです。視聴者の皆さん見逃さずに！

犬っころのくせに猫背である。

にやにゆんにやにやん。

にやにゆんにやにやん。

テレビから甲高い男性の声が聞こえる。

いままさに新たな星が誕生しようとしています。我が人類の技術の結晶であります、超小型惑星誕生装置Ⅳを使えばなんと五分で新たな星が誕生するのです。この装置の開発に携わった世界的に有名な某大学のY氏によれば、以前の装置（超小型惑星誕生装置Ⅱ）では半径が一センチの惑星しか作ることができなかったとのこと。これでは一度惑星に降り立つことができたとしても脱出できませんね。まさにブラックホールです。それはそうとブラックホールは...

やはり人の家を勝手に覗いたりするのは失礼だ、わたしはそう思ってドアを閉めようとしたが、犬っころがこちらを見てわたしと目が合う。

「今のうちにしかできないことを何でもやるのが意外と大切なことかもしれないね」

テレビを見ていた犬っころが突然話すので、わたしはぎょっとする。

そして彼もぎょっとする。

「犬っころが話すのはおかしいかい？」

「うん。聞いたことがない」

「そんなことは単なる比喩に過ぎないよ」

そのセリフはどこかで聞いた気がする。わたしの記憶を彼がたどっているようだ。

「ところでさっきの『今のうちにしかできないこと』はどういう意味だい？」

「意味なんて僕が決めることじゃないよ。言葉の意味っていうのは、言葉を聞いた人がすんなりと頭に入ってくるようにそれを理解する営みに過ぎない、と思うけど」

犬っころのくせにわかったような口をきくな、と思う。同時に納得もする。

わたしにとっての『今しかできないこと』とは何だろう？

わたしは犬っころの言葉にとられる。

わんわんわん。

わんわんわん。

将来に何をしているのかわからないのに、『今しかできないこと』なんて分からない。

犬っころの向こう側で奇妙な物体が目飛び込んできた。液体に浸けられたその物体からは異様な臭い、いやわたしが勝手に想像する臭いなるものが鼻の中に侵入してきた。

その奇妙な物体は文字通りわたしに奇妙な感覚を突きつけた。

あれは誰なのか？

わたしの数十億もの細胞が突然共振し始める。

奇妙な感覚。

ぶるぶる。

ぶるぶる。

共振。わたしは細胞単位まで細分化される。

ひとつひとつの細胞が意識をもったようである。自立していく。

ひとりで動き始めて、それらの細胞はわたしの意識の外へ逃げていった。

わたしのことはおかまいなしに、あちらことらにばらばらと散らばっていく細胞。

こちらを見ているのは誰？

逃げていく細胞を必死につかまえる。待て待て、どこに行くんだわたしの細胞。

頭が混乱していた。考えることはできるか？あれは何者か？『今しかできないこと』は何だ？

気分が悪い。頭と腹が鉛のように重い。わたしは草むらで吐いた。何度も何度も。吐いている途中、頭が震える。何かにがっしりとつかまれている感覚だ。嘔吐が終わるとすっきりするのだが、しばらくしたらまた吐き気を催した。

今度は便意を催した。草むらの中で丸くなる。腰の高さまで雑草が生えているからしゃがみ込むと誰からも見えない。

激しい腹痛。下痢だ。

あっ、今グラスホッパーが飛んだよ。

ぴょんぴょんぴょこぽんぴょんぴょんぴょんぴょん。

ぴょんぴょんぴょこぽんぴょんぴょんぴょんぴょん。

吐き気と便意が収まった後、頭がすっきりした。クリアな世界。ふうーと息を吐いた。

わたしの隣で水車が勢い良く回っている。

ぐんぐるぐりぐりぐんぐるん。

ぐんぐるぐりぐりぐんぐるん。

よし。もう大丈夫。わたしはしっかり考えることができる。

『今しかできないこと』、そしてあれは何者なのか。もうしっかり考えることができる。想像することができる。どのように考えるのかを考えることができる。

わたしは、自分なりの答えを導くことができるようになる。それがわたしの『意味』になる。それが正しいか間違いかは関係がない。導いた答えはわたしの行動次第でどちらにもなり得るからだ。

うれしい。わたしは自由だ。

(すごい。星ってこんなに簡単に作れるんだ)

(こんど、作ってみてよ)

老人は無視している。なんで、と一言だけで、新たな配線とデータベースの構築を作るため作業に没頭している。